

## キリシタン時代とイエズス会宣教師

芦名定道

20号、21号の巻頭言では、近代日本の形成に影響を及ぼした宣教師たちの働きを取り上げた。つまり、20号では近代日本音楽（特に唱歌）の形成に対する宣教師の役割、21号では近代医療における宣教師の活動を論じた。22号でも、これらの号に続いて、「アジア・キリスト教・多元性」研究会において共有できる研究テーマを提案するという趣旨で、巻頭言を書いてみたい。今回、取り上げるのは近世日本、キリシタン時代のイエズス会宣教師である<sup>1</sup>。

近代日本のキリスト教の形成と展開にとって、宣教師は決定的な役割を果たしたが、キリスト教自体（宣教タイプの宗教）にとって、実際、新しい宣教地にキリスト教が伝播し定着する上で宣教師の存在はきわめて重大な意味をもっていた。それは、新約聖書の時代から現代に至るまで変わることのないキリスト教の特徴である<sup>2</sup>。もちろん、宣教師の活動はキリスト教宣教といういわば狭義の宗教的領域に限定されるものではなく、狭義の宗教の外部とも言える文化的諸領域に及ぶことになる。これは20号、21号の巻頭言で論じたとおりである。

しかし、宣教師を焦点としたキリスト教研究は、さまざまな視点から、たとえば、異文化圏における宣教活動の中で直面する困難——これは宣教者に決断を迫る危機的状況である——に対して、宣教師がいかなる仕方で対処したかという点から行うことも可能である。宣教をどのような基本方針に基づいて進めるかは、多くの宣教師たちが直面した宣教活動に伴う内的葛藤と無関係ではない。この点を具体的に考察するために、今回は、キリシタン時代におけるイエズス会宣教師に注目したい。キリシタン時代の宣教師の活動は日本キリスト教史の最初期のものであるが、そこで生み出された宣教方針は、その後の日本キリスト教にとっても重要なものとなる。本稿の論者は、キリシタン研究の専門家ではないので、二次的な研究文献を参照することによって、以上の点について考察を進めることにする。

参照するのは、桑原直己『キリシタン時代とイエズス会教育——アレッシェンドロ・ヴァリニャーノの旅路』（知泉書館、2017年）である。この研究文献は、中世哲学（トマス・アクィナス）を長年研究してきた著者がキリシタン時代のイエズス会宣教について論究したもの

---

<sup>1</sup> キリシタン時代に注目したのは、『福音と世界』（新教出版社）2024年7月号の特集「日本宗  
教史におけるキリシタンと現代」を本稿の論者が企画したことと関連している。

<sup>2</sup> キリスト教における適応主義の問題については、次の拙論を参照。芦名定道「宗教多元性と  
宣教——対話の意味を中心に」（日本宣教学会『宣教ジャーナル』第13号、2023年、4-24頁）

であり、イエズス会宣教の思想的側面を理解する上で貴重な手がかりを与えてくれる。著者桑原の議論は、ヴァリニャーノ研究の古典であるシュッテの研究（Josef Franz Schütte, S.J., *Valignanos Missionsgrundsätze für Japan*, Roma, 1951-1958）などの先行研究を十分に参照して進められており、また、著者自身がトマス・アキナスの研究者であることから、本書におけるイグナティウス・デ・ロヨラの『靈操』（*Exercitia Spiritualia*）の分析はきわめて明晰である<sup>3</sup>。ヴァリニャーノは、日本宣教において危機に直面するが、それを乗り越えて適応主義の宣教を行う上で重要な役割を果たしたのが、イエズス会創立者イグナティウス・デ・ロヨラの『靈操』が示す「靈の識別」「選定」の方法であった。この適応主義は、日本のイエズス会学校教育において具体化された<sup>4</sup>。以下において、桑原の議論をいくつかのポイントに絞ってまとめてみたい。

### （1）「靈操」（靈の識別、実践的選択）

桑原は、イエズス会を西欧世界における修道制の展開過程（修道靈性史）の中で、イエズス会を「社会進出型修道パラダイム」に従って活動をさらに先に進めた修道会と位置づけ<sup>5</sup>、その特徴として「個人としての自律性をもった靈性」（個人としての自律的靈性）——それは活動を行う土地の風習に適合しどんな所にも赴く即応性を伴った生活様式（実践様式）として現れる——を挙げる。この自律的靈性は、危機に直面した個人が適切な判断を行い、実践活動を調整するために必要不可欠であり、世界各地で宣教に関わる人（いわゆる宣教師に限らず）は「靈操」を通して神の意志がどこにあるかを問い尋ねる「偏らない心」（靈操者を動かしている靈がいかなる靈であるかを見分ける「靈の識別」）を身につけなければならない。イグナティウスの『靈操』は、この靈性を養うための手引きであり、その学びは靈操者と指導者とが同伴する形で行われる。桑原の説明によれば、『靈操』は次のような構成となっている。

<sup>3</sup> 『靈操』は門脇佳吉によって解題・解説付きで邦訳され、岩波文庫に（1995年）に収録されている。

<sup>4</sup> 適応主義については、雑誌『アジア・キリスト教・多元性』に所収の狭間芳樹、高橋勝幸らの論考から詳細を知ることができるが、本稿注2で示した拙論においても論じられている。また、「適応」の神学的意義については、神の人間への適応として（啓示や教会に関連して）、近藤勝彦『キリスト教教義学 上下』（教文館、2021/22年）で論じられている（特に、上巻125-128頁、下巻241-242, 269-271, 848頁）。

<sup>5</sup> 修道制の展開（修道靈性史）という点で、桑原は、ベネディクト会（農業経済を基盤とし、「定住」「禁域の遵守」を本質とする）、托鉢修道会（都市の勃興を背景とした機動性をもった「社会進出型修道パラダイム」の実現）に対して、イエズス会（修道制服、共同の聖務日課、定住制などを廃止）を「社会進出型修道パラダイム」への方向をさらに推し進めたものと位置づけている（9）。

「(A)「序」、(B)「核となる部分」、(C)「補足的な諸文書」」の三部構成となっており、(B)の本体部分は「(I)罪の黙想＝浄化(第1週)と(II)イエスの生涯についての救済史的な黙想に分かれ、(II)はイエスの生涯の場面に対応して、さらに、(II-1)受肉(第2週)、(II-2)受難(第3週)、(II-3)復活(第4週)とに対応している」、「第2週から第4週までのイエスの生涯についての救済史的な黙想において、霊操者は自らが生きてきた生涯の物語を、イエスの生涯の物語と重ね合わせることになる。」(桑原、12-13頁。以下においては、頁数のみを記載する)

この二つの生涯(イエスの生涯と霊操者の生涯)の「重ね合わせ」によって、「偏らない心」に基づく「生路選定」が行われる。こうして霊操者は、人生の選択の危機に際して、神の意志を識別することが可能になり、ヴァリニャーノが日本宣教で危機に直面したときも、この「霊操」が彼を助けたのである。

## (2) 適応主義をめぐる外的旅路と内的旅路

桑原は、ヴァリニャーノの日本宣教を、外的旅路(第3章 A・ヴァリニャーノの外的旅路——その生涯と業績)と内的旅路(第4章 A・ヴァリニャーノの内的旅路——日本における布教方針を支えた「識別」)という二つの面から描いている。

ヴァリニャーノ(1539-1606)は、1566年にイエズス会に入会し、1573年にイエズス会東インド管区巡察師に任命された。1578年に中国宣教の拠点マカオに到着し、「宣教活動をするためには、何よりもまず中国語を習得することが大切である」と考えた。「この現地語学習の重視という基本姿勢は、後に日本における彼の立場においても貫かれている」(67)。これは、適応主義が、ヴァリニャーノが携わったアジア宣教における一貫した宣教方針であることを意味している。

ここで注目したいのは、ヴァリニャーノが日本宣教で直面した危機である。1579年、ヴァリニャーノは日本に到着し(最初の滞在は1582年まで)、「すべてにつけてヨーロッパとは正反対」という「生活習慣の相違に起因するカルチュラル・ショック」を受け、また「日本についての都合な情報のみを伝える報告にもとづく日本教会についてのイメージと日本の現実との落差」に衝撃を受けた(68)。日本人とヨーロッパ人との間の信頼関係の欠如(ヨーロッパ人のイエズス会士は日本語を話せず日本人修道士も一人の例外を除いてはポルトガル語を解さない。両者の間には不和と不満が存在する)の現実、ヴァリニャーノは幻滅を味わった。これは、この最初の日本滞在のころの、日本における布教責任者フランシスコ・カブラルの指導方針に大きく起因していた。ヨーロッパ人の自民族中心主義はアジア人に対する露骨な蔑視を生み出したが(日本人にはいかなる学問も教授すべきではない。日本の伝統的宗教に真正な宗教的価値はない)、カブラルはまさにこの体現者だったのである。した

がって、ヴァリニャーノは巡察師として日本の布教責任者カブラルと基本的な宣教方針をめぐり真っ向から対決することを迫られた。日本宣教における適応主義の具体化は、カブラルの宣教方針からの転換においてはじめて可能になったのである。

このような危機の中で、ヴァリニャーノは「霊操」によって進むべき道を識別しようと試みた。それは、「1579年12月10日付（執筆は12月2日および12月5日）の、修道会総会長宛ての長い通信」から確認することができる（69-107）。ここでは、その概略をまとめてみたい。

この通信は、ヴァリニャーノが「当時の日本の布教についての基本的な問題に関して」疑念を懐いていたことを示している。ヴァリニャーノは、「この問題はきわめて扱いにくく難解なものであるので、私たちは自分自身でそれを解決しようとは思わない。むしろ総会長猊下を通して、また修道的な従順を通して私たちは主なる神からの決定を待ちたいと思う」（92）と述べている。

これは『霊操』の「選定の規則」を想起させるが、具体的には、二つの問い（日本宣教において適応主義は適切で正しいか。適切だとしても、十分な働き手がない状況下で、適応主義的な宣教プログラムを推進することは望ましいか）について、まず、問いのそれぞれについて否定的論拠と肯定的論拠を提示し、最後に否定的論拠に対して回答を与えるという仕方での考察がなされる。これは、「選定のための『第三の時機』<sup>6</sup>のための規則の精神とスコラの明晰性」（92）、「霊操とスコラ学との総合」（107）に基づくものと言える。こうした考察を通して、ヴァリニャーノは適応主義に基づく宣教の遂行を選択するという最終判断を行っており、この通信を受け取った総会長アクアヴィーヴァの返書は、ヴァリニャーノの最終判断に確証を与える内容であった。日本宣教において直面した危機の中で、ヴァリニャーノは、『霊操』の選定規則を用いて「個人としての自律的霊性」を発揮することで、困難に立ち向かったのである<sup>7</sup>。

### （3）イエズス会の学校教育と日本宣教

ヴァリニャーノの日本宣教における適応主義は、とくに教育実践に明確に現れている。桑原は、第2章「『イエズス会学事規程』におけるイエズス会学校」で、イエズス会が学校教育に関わるようになった経緯を説明し、『イエズス会学事規程』に即して、下級コレギウム

<sup>6</sup> 「第三の時機」とは、「差し当たり霊操者を越えた力（「霊」）からの明確な介入のない状況において、霊操者が自分自身の知性を用いて道を探求する場面」（108）を意味する。

<sup>7</sup> 一人で決断を行うことを可能にした自律的霊性は、ヴァリニャーノが日本宣教で必要となったものであるが、次のように説明されている。「ポルトガル滞在中、ヴァリニャーノはポルトガル管区のイエズス会員たちのナショナリズムに対する闘いに明け暮れていた。……ヴァリニャーノは総会長メルキュリアンの意に直接従っており、メルキュリアンから詳細な行動指針を与えられていた」。それに対して来日直後は、「ポルトガルでの闘いの際とは異なり、ヴァリニャーノは孤独の中で事態に直面しなければならなかった。」（87. 88）

(中等教育学校に相当する下級学年) と「上級コレギウム」(高等教育に相当する上級学年) についてそれぞれの概要をまとめ、その上で、第5章「キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育」において、適応主義に基づく日本のイエズス会学校教育のあり方を具体的に説明する。第5章は次のように結ばれている。

「我々は、彼らが『ヨーロッパの進んだ学問知識を遅れていた日本に伝えた』と見る先入観を捨て去ってみる必要がある。彼らは日本社会……は固有の伝統を有する高い文化水準を備えた世界であり、日本人を自分たちと対等以上の知的可能性を有する民族であることを認めていた。それゆえ、彼らが日本において計画し、実行に移した教育実践は、ヨーロッパにおいて彼ら自身が学び、また築き上げてきた教育伝統の意義を、彼ら自身にとってもあらたな文化との対話の中で問うてゆく実験と挑戦の場であったように思われる。」(138-139)

しかし歴史が教えるように、日本におけるこの実験と挑戦は、その後中断を余儀なくされ、次の機会には明治近代を待つ必要があった<sup>8</sup>。

今回は、桑原直己の研究に依拠することによって、ヴァリニャーノの適応主義について検討を行った。宣教師はキリスト教宣教の中心的な担い手であり、その信仰、思想、実践、そして文化的影響については、多面的な考察が必要になる。その点で、キリシタン時代のイエズス会宣教は重要な研究対象であり、キリスト教研究のさまざまな分野の研究者が共同研究すべき事例であることが確認できたものと思われる。

(あしな・さだみち 京都大学名誉教授、関西学院大学教授)

---

<sup>8</sup> 適応主義は第二バチカン公会議でローマ・カトリック教会の基本的な宣教方針として確認されたが、「ヴァリニャーノは日本における布教に際して現代カトリック教会の指針の一つである『インカルチュレーション』を数百年先取りするいわゆる『適応主義 *accommodatio*』の方針をとった」(7) と評される。しかし、20世紀のプロテスタント諸教会においても基本的に同様の宣教方針を見ることは難しくないだろう。